

カタルに落ちる

畔奈 りき

《登場人物》

愛津（まなつ） 大学生 県外に下宿しているが、夏休みで実家に帰省中 女

悠里（ゆうり） 愛津の幼馴染 愛津より少し年上で、アメリカにダンス留学していた。

都会的で派手な装いで、実家がある島に帰ってきた。 女

月渚（るな） 高校生 愛津の妹 女

良太（りょうた） 大学生 愛津の幼馴染 愛津と同じ大学に通っているが、夏休みで

実家に帰省中 男

瀬戸（せと） 社会人 良太の友達 高校を卒業後働き始めた。 男

父（ちち） 社会人 愛津と月渚の父で、名前は英二（えいじ） 男

《名前だけ出てくる人》

椎名 夢海（しいな ゆめみ） 故人 絵本作家

椎名は旧姓で、夢海は本名

愛津と月渚の母で、英二の妻 女

瀬戸内海に浮かぶ、とある小さな島の海岸。島の港からは離れており、周囲に人影はない。コンクリートの堤防のすぐ下には薄茶色の狭い砂浜と磯、テトラポッド。

堤防の上に愛津が立ち、海の方を向いている。堤防を背にして海と反対側、つまり島の内陸を向いて道路の端にしゃがみこんでいるのは、良太。

舞台としては、堤防となるセットがあり、その裏側（舞台奥）が海、表側（舞台手前）が島側となる。

愛津、海に向かって叫ぶ。

愛津　もう二度と戻ってくんなー！

良太　何の話？

愛津　……知らん。

良太　は？

愛津　何してんだろわたし。

良太　海行くなって言ったのお前やん。

愛津　マ？

良太　は？

愛津　もういいや。なんかすごいもういいやって気分。

愛津、堤防を降りて道路に立つ。良太を置いて家に帰り出す。

良太　そりや、本人がいいならいいけど……。

良太、立ち上がって堤防の向こう側、波打ち際を見る。

良太　ねー、何か光ってね？

愛津　え？

良太　ほら、波打ち際。

愛津　……ガラスでしょ。

良太　……ガラスやろけど。あんなに光ってんの、見たことない。

二人、顔を見合わせ、砂浜に下りて光っているものを拾いに行き、退場。

愛津の家のリビング。妹の月渚と父が居る。

愛津、登場。

父 愛津、帰ったなら、ただいまくらい言いなさいよ。

愛津 なんでお父さんいるの？

父 会社は休みだよ。もうお盆だぞ。

愛津 あら、ほんと。お墓参り行くの？

父 明日な。

愛津 わかったー。

月渚 あ、お姉ちゃん、聞いた？

愛津 何も？

月渚 悠里ちゃん、帰ってきてるって。

愛津 ……マーーーーー~~~~~~~~?~?~?~?~?

ピンポンと、チャイムが鳴る。

愛津が玄関へ向かい、一旦はける。次に、悠里を連れてリビングに戻ってくる。

愛津 はいはいはいどけどけお前らこの場を譲れ。

父 はいはい。

月渚 はい？ なんで？ 月渚が先にここで宿題してたんだよ。

愛津 お客様が来たからだ自室へ行け。

月渚 お姉ちゃんが自室へ行け。

愛津 馬鹿野郎、わたしの部屋は散らかっているだろうが。

月渚 だから部屋はいつ何時も片しておけとあれほど、

父 月渚。子供部屋はエアコン無いから、お客さんを通せないだろ？

月渚 ふん。

悠里ちゃん久しぶり、くそバカ姉貴と話し終わったら月渚にも会いにきてね！

父、月渚、リビングを出ていき、退場。その間に、愛津は自分と悠里の分の麦茶を出すなどしている。悠里は勝手知ったる感じで座布団に座る。

悠里 急に来ちゃってごめんね。

愛津 いや、ほんとそれ。帰るなら帰るって言うてくれればよかったのに！ 一か月後じゃなかったっけ？

悠里 たまたま、急に、早く帰れることになって。

愛津 それにしたって、一言連絡くれてもよかったのに！

悠里 小さな島なんだから、帰ったらすぐに知れ渡ると思ったの。愛津こそ、朝っぱらから良太連れて、海に行ったら聞いてたよ。そうじゃなかったら、とつくに愛津から会いに来てくれたはず。

愛津 まあ……なんで海に行ったの知ってんの？

悠里 良太の隣のおばちゃんが言ってたって、山田のおばちゃんが言ってたわ。
はあり、そう。

悠里 あ、これお土産。

愛津 あ、あ、あ、ありがとう。何これ。

悠里 お菓子だよ。今度のは、日本人の口にも合うはず。

愛津 わかった。いったん、月渚と一緒に食べるね。

悠里 おかえり、悠里ちゃん。

愛津 ただいま、愛津。

悠里 おかえり！ アメリカはどうだった？ なんか、ますます、おしやれになったね！

悠里 そう？ わかんない、もう周りについて行くだけで必死だったから。文化も言語もなにもかも違うんだもの。

愛津 でも悠里ちゃん、英語得意だったでしょ？

悠里 勉強と会話は違うということに気づかされる日々だった……。

愛津 へえー。大変だったんだ？

悠里 そりゃあ、もちろん。違う言語だからね。

愛津 練習は？ 厳しかったんでしょ？

悠里 そうね、朝から晩まで。でも、もつと大変だったのは、あの、魚が食べられなくて。

愛津 え？ アメリカって魚ないの！？

悠里 そうじゃなくてえ。ほらわたし、小さい時から、島で、とれたての新鮮なお魚しか食べてこなかったじゃない？ だから、とびきり新鮮なものじゃないと、体が受け付けなくなつて……、一回、ひどい蕁麻疹がね。

愛津 ええ！？ 大丈夫だったの！？

悠里 大丈夫、生きてるもの。ほら！

愛津 あ、そっか！ あー、悠里ちゃんが帰って来てくれてよかった。もう一生、帰ってこないかと思ってた。

悠里 ええ？ 一生？

愛津 うん。だって、こんなド田舎の島だよ。もし、四国の面倒見がもうちょい悪かったら服すら買いに行けないから。アメリカの方がいいじゃん。

悠里 ふふふ、そっか。ここは、いいところだと思うけどね。愛津は、大学を卒業したら島を出るの？

愛津 もう出た気ではいるけど。今も、夏休みだから仕方なく帰省してるけど、居てもすることないんだよね。

悠里 文学部だっけ？

愛津 あい。遊ぶん学です。良太は教育学部です。

悠里 勉強も大変でしょう。

愛津 別に、そこまで。単位取れたらいいし。

悠里 ふーん。そうなの？

愛津 ……なに？

悠里 ううん。愛津も大きくなったねえ。

愛津 え、年、そんなにかわらないでしょ！

悠里 あー、愛津とお酒が飲めるようになってしまった……。感慨深い……。

愛津 悠里ちゃんが年食つとる！

悠里 ねえ、近いうちに空いてる日ある？ わたし、お酒持ってくるよ。

愛津 全然いつでもめちゃくちや空いてる。

悠里 よかった。

二人、麦茶を飲む間。

愛津 アメリカも、このくらい暑い？

悠里 どうだったかな。首が締めりそうだったよ。

月渚ちゃんにも挨拶していい？

愛津 わたしとのターンはもう終わりなの！？

悠里 戻ってくればいいでしょ。二人、仲良さそうで安心したわ。

愛津 くそバカ姉貴って呼ばれてるの聞いてた？ 待って、じゃあ月渚の分もお茶淹

れてくるわ。あーあ、悠里ちゃんを月渚にとられる。

愛津、悠里、月渚の部屋に行くということで、退場。

○
4

愛津の部屋。悠里が帰ったあと。

愛津、登場。

愛津 うわ、なんでわたしの部屋にいるの？

父 ん？ 悠里ちゃんは？

愛津 もう帰ったよ。

父 そうか。挨拶しそびれちゃったな。

愛津 夜にまた来るよ。あ、それ。

父 これな。

父は、愛津と良太が今日海で拾った、紙が入った小瓶を手になっている。

父 どうしたんだ？

愛津 朝に、海で拾った。

父 へえ、ボトルメールか。懐かしいなあ。

愛津 ボトルメール？

父 こうやって、瓶とかに手紙を入れて、海とか川に流すんだ。誰かが拾うかな、拾わないかな、もしかして、返事がきたりして、とか思いながらなあ。昔流行ったんだよ。

愛津 海洋のゴミやん。

父 なんだとー、ロマンチックなんだぞ。そうだ、母さんが、これを題材に絵本を書いていたろ。

愛津 え、そうだっけ？

父 覚えてないか？ ちょっと待ってろ。

父、一度はけ、一冊の絵本を手にして帰ってくる。

父 これだこれ。『ゆめみのボトルメール』、ってなあ。そういえばー、母さんの本にしてはちょっと難しい内容だった気がするから、結局愛津たちには読ませてなかったんだっけか。よし、久しぶりに父さんが読み聞かせてやろう。

愛津 ふーん、いい年して恥ずかしいじゃん。

父、愛津、隣に並んで座る。二人の間に絵本を広げる。

父 『ゆめの ゆめみの ゆめみちゃん

大きいお鍋を買ったよ。

さとう こむぎこ バターに なつめぐ

ローズヒップ カスミ草の霞み

カヤツリの葉と蛍の墓

色付けするなら死人にクチナシ

ぜーんぶお鍋で混ぜて溶かして、木枠に入れて海でゆするの。
海で揺すってできるのはね、不思議な、不思議な、

魔法の紙』

愛津もやってみるか？

父 愛津
カスミ草の霞みを用意できないかな。

父 『魔法の紙に書いたことはね、全部本当になるのよ。

ゆめみちゃんには、気になっていることがあります。

誰もわたしを知らない世界で、わたしはどれほど困るかしら？

ゆめみちゃんは気になって、魔法の紙に書きました。』

父 『誰もゆめみを知らなくなる』

愛津、父、顔を見合わせる。

父 『どうなったかな？

ゆめみちゃんは、しばらく待ってみました。けれど、ゆめみちゃんの生活に、変わりはありませんでした。

なんだ、つまらないわ。

しょうがないので、

誰もゆめみを知らなくなる。

その文の下にらくがきをして、ふふと笑いました。

ゆめの ゆめみの ゆめみちゃん

小さなボトルを買ったよ。

魔法の紙をガラスのボトルに、ボトルの口はコルクでふたして、コルクの周りに蠟を詰めると、

海にほうりなげました。

べつに拾われなくてもいいけど

亀が食べたら、のどが切れるわ。

その前に誰か拾ってくれて、

びっくりされると、たのしいわ。

おしまい』

愛津、父、拍手。

愛津
はいっ。

父 はい、愛津さん。

愛津 教育に悪くない？ 亀が食べた喉が切れると知りつつ、自分の楽しみのためにガラス瓶を海に流すって。そんな人間のエゴが、悪びれもせず書かれている。教育に悪いと思いました。

父 おお、愛津さん、海洋保全にご興味が？

愛津 いえ、何にでもケチをつけたいお年頃なんです。あと、あなたの奥さんって、結構なクレイジーですね。

父 私の奥さんはあなたのお母さんなんですよ。

まあね、なかなか、クレイジーな人でしたよ。

いるか？ この本。

愛津 いるかもオ。

愛津、父から本を手渡される。

愛津 で、なんでわたしの部屋にいるの？

父 そろそろこの部屋にも、エアコンつけようかと思ってさ。

愛津 え、一生つかないと思ってたわ。

父 いらぬのか？ でも、愛津も大きくなったんだから、ずっとリビングに居るわけにもいかないし、お客さんに扇風機だけで乗り切れとも言ひ辛いだろう。

愛津 んまあ、いや、ていうか……ああ……。

……ねえ、この瓶、どうやって開ければいいの？

父 ああ、蠟で封してるだろ。割ればいいよ。トンカチもってくるか？

愛津 うん。

父、部屋から出る。

愛津 いや、角とかにぶつけたらよくない？

えい。っしや。

瓶が割れる。客席からの死角などで割るふりをして、紙だけ手に取るので良い。

愛津、紙に書いている内容を見て驚く。絵本を見る。

愛津 ……実録じゃん。

父がトンカチ片手に戻ってくる。

父 何してるんだ、危ないなあ！ ケガしてないか？
愛津 うん。

トンカチをそこらへんにおいて、ガラスを片付け始める父。
愛津、父に紙を見せる。

愛津 お父さん。筆跡鑑定して。

○ 5

月渚、登場。月渚の独壇場。

月渚 はい、この話もう中盤です。え？ はやくない？ 今始まったばかりじゃない？ 起承転結の起のキじゃない？ でもね、この台本見返してみたんですけど、もう中盤がどこなのかわからないんです。だから、いつ言っても一緒だから、言える時に言っときます。この話も中盤です！

この劇に語り部が居たという事実に驚いている方もいらっしゃるでしょうね。しかも、それが月渚っていうね。ねえだって、何でもお姉ちゃんが中心のせいで、月渚っていつも蚊帳の外だから！ こうでもないかと、出てこれないですよ！

さて。

ここから先の場面は、時系列が右往左往します。いや、前後って言うか？ 前後不覚？ なんてかって、月渚が見たい場面を見ていくからです。みんな、月渚の頭についてこないといけませんねー。

月渚は、話をできるだけ拗らせて進めます。できるだけ難しく考えてください。わかった気になったら、だめ。終わりです。だけど、全部、いったん受け入れてください。だってそっちの方が、気持ちよくなれますから。

○ 6

お盆が終わった頃。

リビング、月渚が宿題をしている。愛津が髪をタオルで拭きながら入ってくる。

愛津 何してるの？

月渚
宿題。

愛津
……高校生って作文あったっけ？

月渚
文化祭で劇するの。その脚本を書いている。

愛津
それは……お母さんが、作家だから、頼まれたとか？

月渚
くそ馬鹿か？ 「しいなゆめみ」なんてドマイナーな絵本作家、誰も知らないよ
バーカ。月渚が自分で書くって言ったの。

愛津
……度胸あるね。何、自信あるの？

月渚
自信？ あのさ、月渚は、書くのが好きだから書くって言ったわけ。他に書きた
いって言った子も居なかったし？ 書いた後、文句の一つでも出てこようもん
なら、そいつの方を捻りつぶす。

愛津
こわ。

ね、分かっているの？ 本書くことはね、自分の中身そぎ落として、人に見せ
びらかすってことなんだよ。自分の、気持ちも考え方も、価値観も価値も全部。
自分は、人に見せられるような中身してんの？

月渚
もうちょっと具体的に言ってくれなきゃわかんないんだが？

愛津
これ以上ないほど具体的なんだが？

月渚
じゃあじゃあさ、例を挙げよう。ちょうど困っていることがあるんだ。愛って、
何だと思う？

愛津
あ？

月渚
愛だよ。テーマなの、文化祭の。生徒会が決めたんだけどね、みんな浮足立っち
やって、劇は恋愛ものだよね、って盛り上がってる。月渚モテないからわかん
ないのに。くそ馬鹿じゃんとか思ってたたら、先生が、好きなように書けばいいよ
って言ってきて。で、その後、「愛なんて、まだ難しいよね。大人ですら、それが
何かわからないのに」って。どう思う？

愛津
難しいよね、とか寄り添うだけの先生なんか大したことないから、気にしないで
いいと思う。

月渚
だよね！ でもそれで終わっちゃ、負け、だとも思うんだよね。わからないなり
でいいんだわって、そんな甘い言葉に同意したくないのよ。先生を否定してやり
たいの！

愛津
だから、愛とは何かをわかりたい？

月渚
くそ馬鹿のわりに話が早いじゃん。

愛津
くそばっか出る口だね、ブルーレットで洗淨してやろうか。

月渚、逃げるように退場。

時系列は再び戻る。父と愛津と一緒に『ゆめみのボトルメール』を読んだ後、その日の午後のこと。

良太の家、良太の部屋。愛津が、自分の部屋のように寛いでいる。

良太が、二人分のジュースを持って部屋に入ってきた所。

良太 先生なんて、大したことないんだなって、最近思うよ。

愛津 ん？ うーん。わたしも、最近そう思ってたよ。良太が、教員免許への道を着々と進んでいると知ったときから。

良太 俺のこと、ちと舐めすぎではないですかね。

いや、俺が言ってるのは、先生も、俺と同じ人間なんだな、と思って。自分を指導してくれる人って、基本的には無条件降伏の相手じゃん。だから勘違いしてただけど、大人って、絶対完璧でもないわけじゃん。

でもそれだと、勉強のモチベーション下がるし、なぜ先生を敬うのか、理由が必要だろ。で、考えたのが、先生は同じ人間だけど、先生として勉強して、成長しながら、先生やってる。これは、尊敬に値する。

愛津 知らんけど、それ、先生目指してる立場で言う？

良太 いや、必要だと思うんだよ。何で自分が、子供を指導できるのかって自信の部分がさ。あ、でも、驕り高ぶってはねえよ？ 先生が先生やってる隣で、生徒は生徒やってんだから。驕れる人は久しぶりから。そも、俺まだ学生だし。

愛津 わたし無理だ。自分の仕事に誇りをもって働く未来が見えない。ていうか、働く未来が見えない。

良太 じゃあニートになれば？

愛津 えええ〜……？

良太 先生と生徒の隣で、ニートもニートやるんだよ。

愛津 ちょ、働く意思がないわけじゃないんだけど。

良太 じゃあ働けばいいだろ。何してたって、おおざっぱに見ろよ、人間は全員息してるだけじゃん。誰も、他人が何やってるかなんてわかりやしないんだから。

愛津 要するに、お互い尊重しあってハッピーって話でしょ。そりやお前、自分がちゃんとした人間だと思ってるやつ言うことだよ。人の下には犬の糞があるし、人の上にはお天道様てんしやまがいるの。

良太 で、お前はどの立場にいるつもりなの？ 俺思うんだけど、自分のこと犬の糞だと思ってるやつはダサいし、人間だと思ってるやつは犬の糞の可能性高いぜ。

愛津 太陽だと思ってるやつは？

良太 太陽だろ、もう、自認が太陽までいつてたら。で、何？ 何持って来たの、今度は？

愛津 これを知っていますか？

良太 絵本？

愛津 さらに言うと、この人を知っていますか？

良太 しいなゆめみ？ お前の母ちゃんだろ？

愛津 だよねえ、知ってるよねえ。島じゃ有名だもんねえ。

良太 何、どしたん？

愛津 この世界が、誰もゆめみを知らない世界になっているかもしれない。

良太 ……知ってるけど。

愛津 うん。それでいい。

話戻るけど、良太のことを、ほんとに舐めてるわけじゃないよ。まるで、みんながみんな真面目に頑張ってる、みたいな言い方するから、刺さるんだよ。そういうの。今。

良太 ……俺はイイコだからなあ……。

愛津 自分で言うな、ほんと。こっちがみじめになるの。

良太 え〜？

良太、愛津のトートバッグ（絵本を入れてきた）を勝手にあさる。

愛津 え？ は、ちょっと、何してんの。

良太、トートバッグからコンパクトを見つけ出し、それを開いて鏡を愛津に見せつけるように向ける。光が反射して、愛津に当たる。

愛津 え、何？

良太がコンパクトをぐるぐる動かすと、反射した光が愛津の周囲や、体の表面をぐるぐると行き交う。愛津、反射する光を手で払う。

愛津 何？ え、何？ え、やめて。やめて。

良太 お前、鏡持ってるくせに鏡見たことねえの？

愛津 は？ 毎日見てるわ。

良太 もっとよく見てもいいと思う。

愛津 え？ ば、まぶしいて！ 見えんわ！

しばらく遊ぶ。
暗転。

○
8

愛津がボトルメールを拾った日の夜。

愛津の部屋。一人、小さな折り畳みテーブルに向かっている。テーブルの上には、瓶から取り出した魔法の紙。部屋の床には、酒の空き缶がいくつか置いてある。

愛津の背後には、倒れた悠里と、タオルケットでグルグル巻きになった顔無し胸無し。

愛津、無心でスマホで良太にLINEを送っている。送り終わって暫し虚無になる。

愛津、おもむろに部屋の収納などから、大きなキャリーケースを取り出す。キャリーケースを手に、倒れた悠里をじつと見つめる。

○
9

愛津がボトルメールを拾った日の夜。

愛津の部屋。悠里と愛津、二人で小さな折り畳みテーブルに向かっている。テーブルの上には、酒の缶がいくつか。悠里は酔って泣いている。愛津は別にそんな酔ってない。

いい？ わたしはめっちゃ泣き上戸なんですよっ。

うん。

泣き上戸。OK？いつものわたしとは違うから。これはわたしじゃないから。

酒のー、席のー、アレはアレっていうやつ……。

うんうん。

うわあん、引いてるー、愛津が引いてるー！

引いてない、引いてないよ。

いい、わかってる、もう、どうせわたしなんてそんなもんだよ。引けばいいでしょ、ほら引きなよ、幻滅して追い出せばいいじゃん。

愛津　しないよやめて本当。

悠里　島のアイドルじゃん。わたしって。ダンサー目指して留学して。いや別に、天狗になってたわけじゃないです、断じて。行けるとこまで行きたいだけだったの。でもね、こんな、期待されたら、自分でも勘違いするわ。行けるとこっていうのが、もうちよつと遠くまでだと思ってた。でもなんか多分だけど、だめなんだな、やつぱり。こんな短い手足じゃな。世界で活躍してる人たちは、すごいな。本物なんだわ。リアリティ。

愛津とか、月渚ちゃんとか、良太とか、駿くんとかよつちちゃんとかりんりんとかみんなの、お姉ちゃんだったのに。やだー！　お姉ちゃんなのに！　愛津にこんなところ見られてるもうやだー！

は？　何？　わたしなんかお姉ちゃんになる必要なんてないです。何様のつもり？　それが自惚れと言うんだよ。学べ。まな……

学んだことも、たくさんあるよ。ダンスね、成長したと思う。これからわたし、どんどん成長するんでしょね。まあ同時に限界も見えましたけどね。

不平等じゃないですかー！？

そうだよ。

悠里　まず、鼻。形の良し悪しが分かりやすすぎる。あと、目。大小が。あ、あと、口。あああと、ああもう、顔！　顔いらない！　いさかいの元です。

愛津　顔、要らないの？（笑）

悠里　うん。あのね、いさかいを失くすためには、その原因を根絶するのが一番よ。女って、何かとマウントを取りたがるんだから。登れる山を消してしまお。

愛津　マウントのマウントってマウンテンのマウントなの？

悠里　山と言えば胸の大きさかな。胸、いらないですね。

愛津　顔と胸、要らないんだ？　待って。想像図描きたい。

愛津、鉛筆を手に取り、少し迷って瓶から取り出したまま放置していた魔法の紙を手にする。

悠里　古そうな紙ね。

愛津　紙、これしかなかった。魔法の紙だよ。拾ったの。

悠里　え、いいの？　使っても。

愛津　いいでしょ。お母さんのみたいだし。

顔無し、胸無し？

愛津、紙に顔無し胸無しの想像図を描き始める。

悠里

ああ、そうそう。

あー、うまいうまい。

うんうんうんうん、そう、

あとは……

悠里、ふと顔を上げて。愛津の背後に、実体化した顔無し胸無しの想像図を見つめる。(きぐるみ、人形等で立体的に表現すること。風船等で作り、腕や足を順番にしばませることができるなど、可変的であるとよい。) ふらふらとその実体化した謎の生物に近寄りながらしゃべり続ける。
愛津は、まだ顔無し胸無しには気づいていない。

悠里

そう、腕も、いらなかな。細い方がいいとか太い方がいいとかうるさいから、なくていいわ。足、以下同文。あとウエストかな。細い方がいいだぼっちゃりがいいだあーだこーだ。

愛津

一回ストップ。追いつけない。

悠里

……。

彼氏の概念もなくなればいい。高級ブランドも、仕事も、学歴も。門扉家柄とか、今日日誰も言わないじゃん。同じように消えればいいのに。

愛津、悠里を振り返り、顔無し胸無しを見つける。一瞬思考が停止して、魔法の紙に描いた想像図と、実体化したそれを見比べる。

悠里、人体の大半が失われた顔無し胸無しを見る。

悠里

……でも、全部消した所で、コンプレックスも不平等も、なくなりはないんだろうね。例えば、胃腸の丈夫さとかで、美しさが決まるようになって、全く新しい山を巡って、女どもはマウントを取り続けるに違^{ちが}えねえ。

ところで、これどういう仕掛け(なの。)

愛津、悠里の後頭部をトンカチで殴る。(トンカチは、前に父が持ってきてそのままだったもの。)

悠里、その場で倒れる。

愛津

え？

顔無し胸無し、るんるんと揺れている。

愛津、魔法の紙に描いた想像図と、顔無し胸無しを見比べて。何度も何度も確認して。

愛津
生きてるの？ 顔無し胸無し？ え、描いたから、誕生したってこと？ や、やだ！ やだやだ！

愛津、顔無し胸無しをタオルケットでグルグル巻きにして床に転がす。折り畳みテーブルに向きなおし、そこに紙を置いて見つめる。

愛津
魔法の紙。
本物？

でも、ゆめみのことは知ってる。お母さんのこと、みんな知ってる。昼間に確認したし。

あ、じゃなくてッ、悠里ちゃん。

いや。

いや、だめだよ。こうするしかなかったもん。

え？ どうしよ。

仕方ない？

仕方ない、これ？

○ 10

瀬戸
仕方ない、つつって、わかったって返事したの？ 夜中に？ かぐや姫ごっこを？

良太
うん。

瀬戸、良太、四国本土にある街で遊んでいる。タピオカを片手に持つ。

愛津がボトルメールを拾った日の翌日のこと。良太は朝から船に乗り、四国本土に住む瀬戸の家に遊びに来た。

良太
ばれたかと思った。

瀬戸
まだ、ばれるばれないとかやってんの？ 俺への当てつけということ？ その

良太
LINEのやり取り、まだ残ってる？
あるよ、見る？

瀬戸 見る。

『ねーねー、かぐや姫ごっこしよー

わたし、かぐや姫ね

良太は、かぐや姫をどうしても手に入れたい人』

『わかった』

『求婚して』

『かぐや姫、結婚してください』

『では、カスミ草の霞みを持ってきなさい』

何？ この女。ほんとにこの女がいいの？

この女がいいとかじゃねえんだよ。

はいはい、そういうプログラムね。へえへえ。

何？ カスミ草の霞みって。

良太 さあ……。でも、できればもってこいって言われてるんだよな、たぶん、これ…。

瀬戸 『カスミ草の霞みを使って、パピルスを作るから

このパピルスを作るかどうかは、わたしの人生と、良太の人生がかかっているから、まじで』

パピルスって何？

紙の一種だよ。

紙の一種？

エジプト辺りの、死者の書とか書いてるやつ。

瀬戸 は、これだから進学クラスは、自分の知識を世間の常識と思ってるから……。

とにかく紙だよ。

瀬戸 カスミ草の霞みを持っていけば、良太は晴れてこいつと結婚できんの？

良太 いや？

瀬戸 自分勝手すぎん？ 冗談と頼み事を緋い交ぜにすなよ。何この女。まじ？

良太 だから、まじとかじゃないんだって。

瀬戸 カスミ草の霞みは俺もわからんっすね。

良太 でしょうね。

瀬戸 ……その、概念的な話なの？ もしかして。これがカスミ草の霞みだわ、と自分が思えば、そう、みたいな。

良太 ワンチャンありやな……。

瀬戸 んじゃ、任せてくださいよ。俺、基本そのスタンスで生きてる感じなんで。

良太 ……。

瀬戸 わからんことが多すぎるから。

良太 仕事、上手くいってないの？

瀬戸 もろろ、仕事の話じゃないってろろわかってるでしよろろ？
良太 重い話をしに來たわけじゃないから。
瀬戸 それな。重い話と前髪は紙一重。

○ 1 1

謎時空ターン。

月渚、人生ゲームを持ってやってくる。

月渚 ども、月渚のターンです。

良太くんには、瀬戸っていう友達がいって、瀬戸くんは高校を卒業してから地元の会社で働いています。ちなみに、四国本土の人で、生粋の陸^{おか}の人間です。海が荒れて舟が出なくて学校を休む経験を、一度もしたことがない人です。瀬戸くんはお盆休みの間に、良太くんを本土に呼びつけ、デートをしていました。これから、良太くんの話をするか、お姉ちゃんの話をするか、ルーレットを回して決めようと思います。
人生ゲームを使います。
えい。

月渚、ルーレットを回す。

月渚 4。（出た目を言う。）

……ルールを、何も決めずに回したので……。

月渚は、お姉ちゃんの方が好きなので、お姉ちゃんの話をしします。
あ？ 残念、お姉ちゃんが眠そうなので、やっぱり良太くんの話をしします。

月渚、ポケットからシャキン！ と髪を梳かす櫛を出して、その場に置く。
人生ゲームを持って退場する。

○ 1 2

瀬戸の家。お出かけから帰ってきた所。コンビニで買ってきたご飯とかお茶とかを袋から取り出しつつ。

瀬戸 その、プログラムって、何なの？

良太 さあ……？

瀬戸 さあ、じゃないんだよな。俺、それでフラれてるから。

良太 その割には、あっけらかんとしてるよな……。

瀬戸 やりたいことをやりたい人間なものですからー。

良太 あー。どっから言おうか……、俺が七歳のとき、じいちゃんに引き取られて島に来て、そのとき、愛津に初めて会ったんだけど、それより前の記憶が、俺、ないんだよ。

瀬戸 ま、小さい時の記憶なんかね、

良太 じゃなくて、愛津に出会った瞬間、俺が生まれたんだよ。

瀬戸 ポエム？

良太 違うって。そもそも、俺が島に来た理由がさ、子供の時の俺が、言葉は話さんし、表情もないし、常にボーとしてたっていう……わかる？ 療養、療養のために島に来たんよ。今じゃ、こう、無事にデカくなってるけどさ、あ、だから、じいちゃんことあることに喜んでるよ。良太の心が治ったのは、田舎の環境が良かったからじゃーって。……俺だけホントのこと知ってるの。原因は愛津なの。愛津を見たとき、頭の中に書き込まれた。プログラムが。こう。(頭に書く真似をする。) こう！？(頭に書く真似をする。)だ、誰の手なのよ、これは。

良太 でも、こう書かれたんだよ、何て書かれたか、笑うなよ。「生涯、愛津を愛すべし」。えー、恥ずかちーねーねー。それがプログラム？

瀬戸 そうだよ。「愛津を生涯愛す人」として、俺が出来たんだよ。だから、俺は愛津を一生愛さんとだめだし、愛津が死んだら、お役御免で俺も死ぬと思う。

瀬戸 つ、かり！ 愛、愛って簡単に言うね、男は。

良太 わからんけどよ。アンドロイドだと思ってたもん。ずっと。

瀬戸 自分のこと？

良太 うん。だから、俺を評価してくれる人は、現れんと思ってた。

瀬戸 評価してくれる人？

良太 うん。

瀬戸 評価？

良太 え？

瀬戸 愛してくれる人じゃなくて？

良太 ……そう、そうね。

瀬戸 うふふふふふ。

良太 うん、ふふ……(笑)(？)(曖昧な笑み)(続きを話してもいいか窺うやり取り)

どんな感じだったかと言うとね。全部他人事。人も景色も、時間も一分一秒、一

月一年、俺が動くんじゃないやなくて、俺の周りが動く感じ。生涯を通して、やることは既に決まっているから、無難に、過ごすだけ。

瀬戸 俺に、出会うまでは！

良太 いや、うん、まあ、そうです。

瀬戸 事なかれ主義的には、同性に好かれるのは辛かったんじゃないやねえの？

良太 デリケートなんじゃないの、そういう話は……。

瀬戸 人によるよねえ。

良太 ……瀬戸さ、俺に、そういう目で見てます、つつつて、告ったじゃん。

瀬戸 うん。

良太 それ聞いた時、「ああ、俺、見られてるんだ」、って、初めて気づいたんだよ。ん、違うか。「他人には俺が見えてるんだ」、かな。どっちかっていうと。

俺も、生きてるんだなあ、と。思ってた。

それから、自分について調べることにした。俺はどんなやつで、俺は何がしたくて、俺の周りには誰がいて、その人たちはどんなやつらで……とか。俺は人間だって証拠を、そこから探した。今も探してる。常に探して確認しないと、俺って、すぐに消えるから。自分の姿は鏡を使わないと見えないだろ。手間かかるよね、自分の世話って。瀬戸がいなきや、まだアンドロイドのままだったかな。

瀬戸 俺がエロい目でお前を見なきや……。

良太 正しく言うな。せつかくいい感じにまとめたんだから。

瀬戸 ……やったじゃん。

良太 まあね。

瀬戸 透明なアンドロイドを人間にまで仕立てた俺と、ずっと一緒にいたいとかいう気持ちはない？

良太 俺には愛津がいるので……。

瀬戸 も……結局……。

その、別に他の人を愛してはいけないわけではないんですよ。いいじゃん。愛津さんのことを嫌いになるわけじゃあるまいし。

良太 どうかな……。愛って何？

瀬戸 知らんわ。

良太 だよな。知ってたら、あんな告り方してこんよな。

瀬戸 んふ。

良太 でも、愛の定義がわからん以上、俺も命がかかっているから、できるだけ愛津の近くにいたい。

瀬戸 一理あるねえ。

良太 というわけで。

瀬戸 うっわ、やられた、二重でフラれたじゃん。

良太　ねえ、電子レンジ借りていい？
瀬戸　いいよ。

良太、コンビニ弁当を持って電子レンジへ。電子レンジの前に立ち、温め終わるのをその場で待つ。ふと瀬戸を振り返る。

良太　え？　今の話、そんなにナチュラルに受け入れる？　冗談とか嘘とか疑うような普通？　俺、七歳までの記憶が無いって言ったんだぞ？

瀬戸　嘘なの？

良太　嘘じゃない。

瀬戸　嘘じゃないんじゃん。

良太　嘘じゃないけどよ。

瀬戸　じゃあ、俺がお前のこと好きって言ったとき、嘘だと疑った？

良太　いや？

瀬戸　それと一緒にだよ。

良太　多分違うぞ。

瀬戸　一緒なの！　そんなこともあるんだなあ、よ。

良太　視野が広すぎんよ。

瀬戸　それに、良太がプログラミングされた自分を変だなあと思うのと同じように、俺も、自分のこと変だなあと思ってるから。

良太　……変じゃないよ。

瀬戸　変なんだなあ、これが。悪いことじゃないけどね。ま、自然の摂理と違うということは概ね変と言っていいっしょ。

俺未だに、親にバレたら泣かれると思ってるから。泣かないだろうけど。親が、息子のこと大事にしてるのはわかってるから。でも、息子も、親のこと大事にしてるわけ。

良太　変じゃないのに……。

瀬戸　んー、ま、問題はそこじゃないって話。

俺もやったことあんよ、自分のこと調べるの。自分の気持ち疑って、次に性別疑って、正常なのか疑って、ネットで調べて、色々知って、逆にもっとわかんなくなっ。性別って何？　つか俺って何？　の境地を経てるのよ俺は。

だからもう、わかってんの。

そんなこともあるんだなあ、で、ひとまずおっけーってね。俺が俺なら、俺は俺だもん。だから、良太も、お前がそういうルールで生きてると思ってるんなら、そういうことなんでしょうよ。

良太　……ふうん……。

レンジがチンと鳴る。

良太　なんか、ごめんな。

瀬戸　ごめんと、いいよは、無駄遣いしちゃだめなんだって。

でも、ま、確かに？　お前、何にもないと思って、俺んち平気で泊まるからなあ。

良太　……は？

瀬戸　はっはっはっは。

良太、温めた弁当を両手で持ってその場を右往左往する。その時、「11」で月渚が置いていった櫛を見つける。

良太　……。……あのさ、髪、梳いてやるっか？

瀬戸　ええ……？　慈悲深……？……？　頼む……！！

良太、瀬戸の背後に座って、櫛で髪を梳かし始める。

瀬戸　どういう了見？

良太　これくらいしか、できないから……。

瀬戸　情け……？

良太　自衛。

瀬戸　やば……。

しばらく髪を梳くシーン。

○ 13

愛津がボトルメールを拾った日の翌日の夜。

愛津の家のリビング。父が座って、『ゆめみのボトルメール』を読んでいる。

時間は夜。遠くから、風呂が沸いた音声「お湯はりが終了しました。」

着替えを持って通り過ぎる愛津。風呂へ。舞台を横切る。

父　愛津……。……。

父が、愛津に気づき引き留めようとするが、声をかけるのが遅く、間に合わない。

い。愛津は、舞台袖にはけた。

月渚が、原稿用紙とシャーペンを持って登場し、リビングのテーブルで宿題（演劇の台本を書く）を始める。

愛津がボトルメールを拾った日の翌日の夜。

愛津の家のリビング。父が座って、『ゆめみのボトルメール』を読んでいる。

月渚が、宿題（演劇の台本を書く）をしている。ちよっと行き詰っている。

月渚 お姉ちゃんさ、悠里ちゃんのこと、ホントに何も知らないのかな？

父 ……知らないんだろうなあ。

月渚 ホントに、何一つ、知らないと思う？

父 そう言ってたぞ。

月渚 だっておかしくない？ 昨日の夜、悠里ちゃんも、くッそ酔って騒いだの、聞こえてたでしょ？ あのテンションなら、身投げしてもおかしくないよ。

父 縁起でもないこと言うな。あるもんか、こんな田舎で、そんなこと。

月渚 あそーね！ 田舎いいとこ平和なところ！ てか、何？ 何読んでんの、それ。

父 『ゆめみのボトルメール』。愛津のやつ、ここに置きっぱなしにしてるんだ。

月渚 お母さんの本？ 貸して。

月渚、速読。

物陰から、様子をうかがう愛津。着替えは持ったままで、風呂にはまだ入っていない。

月渚が最後のページに到達した頃、父が声をかける。

父 月渚は、母さんのこと、どれくらい覚えてるんだ？

月渚 全然。だから、お母さんの人格についての情報は、絵本だけ。

父 そっか。

月渚 そして何？ は？ 意味が分からん。あんたの奥さんおかしくね？

父 姉妹だなー。

月渚 自分のことを誰も知らない世界を望むのもおかしいけど、そこであんまり困らんのが一番わからん。困るわ、普通に。

父 そこ、考えてみたんだけどな。ゆめみを知らない世界でも、新しく知り合うことはできるだろ？ つまり……

月渚 いやいや、あのね。おじさん、よく考えな。これまでの人間関係が無かったこと

になるんだよ。友達だけじゃないよ。家族もだよ。え普通に精神ガタつくわ。貸したお金も返ってこないよ。

父 えっ、それはちよつと困るなあ。

月渚 でしょ！？ 困らないとしたら、そういうことが一切起きなかったときだけだよ。

父 お？ そのアイデア、シンプルだな。や、いいな、父さんそういうわかりやすいの好きですね。

月渚 ただ問題なのは、家族も知り合いもいなくて、人付き合いが全く無い人生なんてさ、

父 ちよ、やめなさいよ。そういう人も居るから。

月渚 でも、お母さんは違うってことだよ。月渚たちが居るもん。

父 そこは、ほら、これフィクションだし。

ムツとする愛津。

月渚 フィクション？

父 うんだって、絵本のゆめみちゃんと、本物の母さんは、別だろ？

月渚 えー、まあ、

愛津 ストップ。

愛津、物陰から出てくる。

月渚 お姉ちゃん。お風呂は？

愛津 月渚が先入って。

月渚 何で？

愛津 いいじゃん。先入って。

月渚 なんて？

父 月渚、愛津は父さんに用があるんだって。

月渚 月渚がいちゃいけないの？

父 秘密の話をするんだよ。

月渚 キモ。風呂つてくる。

父 いってらっしゃい。

月渚、はける。

この場に、父と愛津。

父 絵本、ここに置いたろ？

愛津 月渚の意見を聞こかと思て。

父 どうだった？

愛津 あいつ読むの早いね。

父 母さん似だからな。

愛津 お母さんはあんなに口悪くなかったでしょ。

父 そりゃ、子供の前じゃ、ちよつとは考えて喋ってたよ。そうか、月渚はたぶん、母さんのお腹の中で、母さんのホントの喋りを聞いてたんだな。

愛津 へへっ。ホントの喋りって何。え、じゃあ月渚なら、お母さんの気持ちも全部わかるかな。

父 うん。ちようどさっき、考えてくれたのに、なんで止めちゃったんだ？

愛津 わたしが止めたのはお父さんだよ。

父 おれえ？

愛津 ねえ、それフィクションなの？

父 ……？ (笑) フィクションだらう (笑) え、愛津さん！

愛津 だってボトルメールあるじゃん。実物。

父 あれは、ま、本気で欲しかったつてことだろな、誰もゆめみを知らない世界が。っなんて (笑) あー、だから、こう、作家としての気持ち盛り上がりすぎて、絵本を書くだけじゃ物足りなかつた結果、ほんとにボトルメールを流したつてわけだ。

愛津 わたし逆だと思っただけ。

父 ん？ ああ、ボトルメールを流してから、絵本を書いたかもしれないな。それは、父さんも知らない。

愛津 そうだね。

父 月渚が言ってたけど、誰もゆめみを知らない世界で、ゆめみが困らなかった理由、シンプルに考えればいいんだよね。

父 それだよ。急に頭がサーーって冴えたねえ。今まで、難しく考えすぎてたのかもしれないな。

愛津 うん、で、聞いて。つまり、誰もゆめみを知らない世界で、ゆめみが困ることは、何も起こらなかったんだよ。ゆめみのことを誰も知らなくても、ゆめみには関係ないの。ゆめみが言ってるのは、そういう、知らない、なんじゃない？

父 そういう、知らない？ とは？

愛津 お父さん。お母さんって、どうして死んだんだっけ。

父 ……。夜中に、海に飛び込んだんだろ？ 文豪によくある、世を憐むやつ。
愛津 そう。そうだよね。

父 月渚は、覚えてないってなあ。あの子はまだ、大分小さかったからなあ。

愛津 ああ、お葬式の光景だけは覚えてるとか、しおらしいこと言われなくて、よかったよね。

父 そうだな。

愛津 お母さん覚えてないって、どんな感じなのかな……。

父 さあ……。

愛津 ……何だっけ？

父 何が？

愛津 わかんなくなった。もっかい考える。

愛津、父に手を出す。父、絵本を愛津に渡す。

父 必死だな。

愛津 そりやそうでしょ。恐怖体験だもん。

父 親としては、ごく当然の望みだと思うけどな。特に、子供が女の子なら。

愛津 そうかな。

愛津、リビングを出ようとする。

父 愛津。

愛津 何？

父 悠里ちゃんのこと、本当に、何も知らないよな？

愛津 知らない。

愛津、退場。

リビングに残る父。

電話のコール音が鳴るが、父は電話に出ない。やがて、留守番電話に切り替わる。

留守電 只今、電話に出られません。ピーと鳴りましたら、お名前とご用件をお話ください。ピー。

「あの、悠里の母ですけど。夕方から何回も家行ってるんですけど。なんで居留守使ってんの？ わたし駐在さんに言いましたから！ 何、怪しいことしてないんだったら出てくればいいでしょ！？ こんな島で引きこもれるわけないんだから——」

ピー。メッセージをお預かりしました。現在、二十四件、保存しています。

父、いつの間にか、リビングを片付けてはけている。

○ 15

愛津がボトルメールを拾った日の翌日の朝、午後。

愛津の部屋。愛津、折り畳みテーブルに向かって座っている。愛津の背後には、大きなキャリーケースがある。

父が部屋に入ってくる。

父 あれ、愛津。悠里ちゃんは？

愛津 シャワー浴びるってんで、早朝に帰ってたよ。

父 そうか。

父、部屋を出ていく。

愛津、キャリーケースの傍に寄り、背に庇うようにして座る。

父、部屋に入ってくる。

父 愛津、悠里ちゃんのお母さんから電話かかってきて、悠里ちゃんが、家に帰ってないらしいんだが。

愛津 帰るって言ってたよ。

父 いやあ、そうだよなあ。

父、部屋を出ていく。

愛津、キャリーケースを抱きしめる。

父、部屋に入ってくる。

父 愛津、悠里ちゃん、昨日、何か言ってなかったか？

愛津 知らない。

父 少し思い詰めてなかったか。

愛津 少しね。でも、そういうこともあるよ。

父 そうだよな。すまん。今、みんなで悠里ちゃんを探してるんだが。

愛津 わたしも行く。

父 ああ。

父、部屋を出ていく。

愛津、キャリーケースに乗って舞台上を縦横無尽に駆け巡る。最終的には部屋へ戻り、キャリーケースに腰かけてぼうっとしている。

月渚、部屋に入ってくる。

月渚 お姉ちゃん、悠里ちゃんのこと、本当に何も知らないの？

愛津 知らないよ。

月渚 嘘だ。悠里ちゃん、お酒飲んで結構荒れてたよね。行きたい場所とか、遠距離の彼氏とか、いい感じの高層ビルとか、海とか山とか、何も聞いてないわけ？

愛津 愚痴は聞いたけど。愚痴だけだよ。

月渚 何、そのキャリーケース。

愛津 ……わたしも、アメリカ行こうかなって。

月渚 やだ。やだ！ だめ！ 後追いつる気なの！？ やっぱり何か知ってるんではない！

愛津 知らないってば！ 悠里ちゃんのこととは、何も知らない！

月渚 ……どこにも行かないでよ。

悠里ちゃんが、あんなに荒れるなんて知らなかったよね。月渚、声と音しか聞いてないけど、すごかったもんね。

愛津 知らなかったね。

月渚 みんな、すごいショックなんだよ。お姉ちゃんまで、どっか行かないで。

月渚、部屋を出ていく。

○ 16

愛津がボトルメールを拾った日から二日後。

愛津の部屋。愛津、『ゆめみのボトルメール』を持って、キャリーケースの上に座っている。

愛津 どういう「知らない」なんだろう。

愛津、ボトルメールに入っていた魔法の紙を手取る。

愛津 へ、世を憐むって何だよ。ね、お母さん。

……。

願いは、叶ってなかったりして。気まぐれに効果が出るとか。気まぐれは困るんだけどなー！ どっちかわかんなくなるじゃん。あーあ、面倒なことですね。魔法の紙なんて作り話だったらよかったのに！

愛津、歌の勢いでキャリーケースのチャックをちよつと開けてすぐ閉める。

愛津
アッ。

明日明後日が限界かな……。

スマホに電話がかかってくる。

かけたのは良太、電話に出る愛津。

良太
今何してる？

愛津
小腹が空いたけど太りたくないからドーナツの穴食ってる。

良太
哲学的。今からそっち行っている？

愛津
いいよ。

愛津、魔法の紙をポケットなどに入れて隠す。

良太が部屋に入ってくる。手には、瀬戸の家で食べた弁当ガラがある。愛津に弁当ガラを渡す。

良太
カスミ草の霞みを持ってきたよ。

愛津
マ？ 弁当ガラじゃん。

愛津が弁当ガラを開けようとして、良太が慌てて止める。

良太
あつ、カスミ草の霞みが逃げるから、慎重に。

愛津
……何も入っていないよ？

良太
花屋で取ってきた、カスミ草の周辺の空気が入っている。

愛津
それがカスミ草の霞みなの？

良太
俺がそう思ったから、そう。

愛津
それありなの？

良太
ありなんだって。いいっしょ、存在しないものなんだし。

愛津
はあくん？ そういうこと？ ええ、材料集まるじゃん……作れちゃう……。

良太
パピルス作るの？

愛津
作らないよ。カヤツリの葉なんか買っていないもん。

良太 は？ 買っとけよ。俺は用意したのに。

愛津 別に作らなくていいんだよ。作れるか作れないか、それが問題だから。確認っていうか、保険の窓口？ そしてわかった。本物確定。どうもありがとう。

良太 何の話？ 何だよそれ。

あ。聞いたよ。悠里ちゃんのこと。入水自殺したらしいね。

愛津 ……入水自殺！？

良太 え？

愛津 そういうことになってんの？

良太 そうって聞いたよ。

愛津 はあ、へえ、そう……。

良太 ほんと、びびったわ。本土から帰ってきたら、大変なことになってんだから。

愛津 そっか。昨日の朝からいなかったもんね。友達の家、楽しかった？ わたしにも紹介してよ。

良太 いや……あいつは、友達の友達は親の仇なタイプだから。

愛津 バイオレンス。

良太 悠里ちゃんさ、しっかりした人だったからさ。

愛津 うん……。

良太 でも、だからこそ、思い詰めちゃったのかな。俺ら、お世話になってばかりで、アメリカ行くなってなつたときも、島中で盛り上がっちゃってさ。やっぱ重荷になつちやつたのかな。

愛津 そうだね。

良太 修学旅行の時とか、悠里ちゃん、島中の子供にお土産買ってきてくれて、金額すごいことになってたよな。

愛津 あー、あつたね。小分けのお菓子とか買えばいいのに、一人一人にストラップとかメモ帳買うから。

良太 俺、まだあのメモ帳持ってる。

愛津 意外と減らないよね、メモ帳って。

良太 考えてみると、俺らって、悠里ちゃんのこと全然知らなかったんだな。

愛津 全然知らなかった？

良太 そう。何考えて、何に悩んでるのか、全然知らなかった。

愛津 ……それかな。もしかして。

良太 それ？

愛津 こっちの話。

良太 あそ。

愛津 良太ア。

良太 ん？

愛津 誰かの事を全部知るのがって、多分無理じゃん。例えば、内面とかさ。
良太 そりゃあ、全部は知らんよな。お前の内面だって知らんし。
愛津 それって、その人の事を知らないってことに、なるのかな。
良太 知らないことがあるのに、知ってるとは言えんけど、全く知らないっていうと違
くね。それは、悠里ちゃんが可哀そうだろ。
愛津 悠里ちゃんね。うん。悠里ちゃん、ね、悠里ちゃんの話やめない？
良太 ……そっか、不謹慎か。
愛津 どうも。

○ 17

謎時空ターン。

月渚、『ゆめみのボトルメール』を読んでいる。

月渚 ……、月渚のターンです。

魔法の紙が実在して、この絵本の内容が真実であるという話は、実は月渚の独自調査によるものです。

つまり、全部月渚の妄想で、真実とは全然違うかもしれないのです。

ただ、お姉ちゃんが月渚に何かを隠していることは知ってたし、お父さんも、以下同文、よって、色々考えて、お話が通るようにしてみた、感じ。

お姉ちゃんもお父さんも、月渚を守らなくちゃいけないものだと思っているので。大事なことは、教えてくれないのです。

おっと、ここにきて全てがでっちあげの可能性が出てきてびっくりされていますね？ でもよく考えてください。あなたが今日、観に来たものはなんですか？

お芝居ですよ。作りものですよ。

月渚が持つてるこれは？ 作りもの。月渚も？ 作りものです。

月渚が立つてるここ！ 舞台は？ 作りもの。客席は？ 作りものですよ。だってそこに悠里ちゃんいるし。

空気感壊された？ 知らないですそんなの。自分が本当だと思えば本当になるの。逆を言えば、本当なんてものは、自分が本当だと思っただけに過ぎないもんですよ。

月渚、リビングの机に『ゆめみのボトルメール』を置いてはける。

○ 18

愛津がボトルメールを拾った日から二日後の夕方。
愛津の家のリビング、父と愛津がいる。父は『ゆめみのボトルメール』を持っている。

愛津　　というわけ。

父　内面を知らないか……。それって普通のことじゃないか？　魔法の紙に書いてお願いするまでもないような気がするけど。

愛津　ゆめみは、それを確かめたかったんだとしたら？

父　ええ、どういうこと？

愛津　その前に、月渚は？

父　ゆきちゃんと、山田マートのくじ引き全部当てるまで帰れまテンだ。

愛津　高校生にもなって恥ずかしい奴だわ。でもま、暫く帰ってこないね。

父　お父さん。腹ア割って話しましょうよ。

父　おお……。なんだ。また改まって。

愛津　お母さんの話をするよ。いい？

父　いいよ。

愛津　前にさ、お母さんがどうして死んだのか聞いた時、言ったよね。お母さんは、世を儚んで自殺したって。でも、世を儚むって具体的に何？

父　え、それは……。政治の不安とか？

愛津　違うでしょ。もつと自分の理由で死ぬでしょ、死ぬ時は。わたし調べましたけど、世を儚むって言葉の意味。

愛津、スマホの画面を父に向ける。画面には、「世を儚む」という言葉の解説が載っている。

愛津　生きることが虚しくなるって意味だよ。生きてても死んでも一緒だなんて思ってたってことだよ。

父　ええ、いや、それはそれよー。

愛津　それはそれって何？

父　その、辞書には一般的な意味が書いてあるだけなんだよ。で、それを具体的に言えば、政治の不安とか、経済の不安で、生きる当てがなくなったって意味だろ？

愛津　いや、誰がそんな殊勝な理由で死ぬの。いいから、わたしが言いたいのは、何を理由にそんなに虚しくなったかって話で、

父　だから、違うって。

愛津　だから何が！？　もう、しつかりしろよ、おっさん！　英二くん会社員でしょ、

説明して。

父 ……やめろよ、英二くんなんて。

愛津 何で。もう全部何で？ 英二くんじゃん、あなた。やっぱりさあ、お母さんの自

殺のこと、色々知ってて隠してるんでしょ。

父 いや違う、やめろっていうのは、愛津、こんな話したってしようがないだろ。

愛津 じゃあ、わたしの秘密も話すから。それであいこにしようよ。

父 ちよっと、いや。

愛津 わたし、島から出たいの。県外の学校に行ったら出られると思ってたの。でも、あんたとか、近所の人とか、部屋にエアコンつけたりとか、わたしが島に帰ってくる準備してるでしょ。もし、わたしが帰らないって言ったら、お父さん、どんな顔するの？

父 愛津。

愛津 瀬戸の花嫁になりたいと思ってたの。誰か、島外の人と結婚することになったら、島から出られると思ってたの。でもあの曲、よくよく聞いたら、島から島に行く歌じゃない。結局狭苦しいの。しかもみんな、わたしには良太がいるとか――

父 ……何で知ってるんだ？ 瀬戸の花嫁の話。

愛津 え、ま、世代じゃないけど、

父 ……、夢海から、聞いたのか？

愛津 は？

父 夢海がいるのか？ そこに、帰ってきたのか？ お盆だから。

愛津 お盆？ ……うん、そうだよ。

父 俺を恨んで、愛津に喋ったんだな！？ 俺がまだ、墓参りに行ってないから！

愛津 おとッ……。

父、泣き崩れる。

父 お前が言ったんじゃないかあ。

お前が、政治と経済の不安で死ぬって言ったんじゃないかあ！

父は泣き崩れている。愛津は、声を出さないように口を押えて父を見ている。

父 ……愛津が最近、ボトルメールを拾ってきたんだ。

それで、『ゆめみのボトルメール』を、久しぶりに読んだんだ。

あの話なんなんだよ。「誰もゆめみを知らなくなる」なんて、そんな悲しいこと、願うなよ。あの絵本が実話だなんて、言わないでくれよ。

……。瓶に入ってた紙に、絵本と同じ願いが書かれてあった。

……。 (眺めの沈黙)

愛津 ……誰もゆめみを知らない世界で、ゆめみが困らなかったのは、元から、誰もゆめみを知らなかったから。

父 だって、お前、何も話さなかったじゃないか。

愛津 本当に、何も話さなかった？

父 わからなかったよ、俺には。お前の話、難しいから、あれじゃ誰も、お前のことなんてわからないよ。だから、変わってるって言われんだよ。作家だから、変わってるって。

でも、夢海。そのわからないってのは、お前のことを愛してないのとは、絶対違うんだよ。

お前が、みんなに知ってほしかったお前と、俺の知るお前は、そこに差が、あったかもしれないけど。でもさ、俺の知る夢海も、一人の夢海だったろ？ じゃないと、俺の奥さんは、だって夢海のはずなんだから。……違うかな。

愛津、父の言葉を噛みしめて何も言わない。

父

……会いたかったよ。でも会わせる顔がないんだ。目え閉じちゃったよ。こうすると、せつまい海岸が見えるんだ。夜だから、水が真っ黒だったな。いつでも見えるぞ、お前に会いたいから。でも、同じ海岸に立っても、お前のよくわからない言葉は本当によくわからなくて、ただやれって言われたことだけはわかって、俺はもう何回も、お前の背中を押したよ。

愛津 は……？

父 ああ、そうなんだ。俺はお前の背中を押したよ！ 愛津も、月渚もまだ小さいのに！ お前の顔が辛くて、見れなくて、押しにくれて頼むから、いや、頼まれたからって俺は、……もつと、違う、あの時ちゃんと言うことができたら――。

愛津 こっち見て、お父さん。ごめんね。喋らせてごめん。

父 ……あれ、愛津、か？

愛津 愛津だよ。ずっと愛津だけ。

父 なんで……？

愛津 あんたがお盆とか言うから、いや、ごめん。

父 あ……俺、俺は、本当は秘密にしておくはずで……。

愛津 まあ、そりゃそうよな。月渚には秘密にしておくから、ダイジョブ。

父 違うだろ。

愛津 違うこたないよ。それに、わたしより罪状はマシだと思うよ。

父 え……？

愛津 ……どうしよう、お父さん。

○
19

愛津がボトルメールを拾った日から三日後の午前。
愛津、父、月渚の墓参りの日。

父、お墓の前でずっと手を合わせている。月渚と愛津、草むしり。

月渚　ずウウアツツ草抜き！

愛津　アイス食いてえ。

月渚　駆逐してやる！　根本から！

愛津　午後から良太んち行ってくるわ。

○
20

愛津がボトルメールを拾った日から三日後の午後。

良太の家、良太の部屋。

なぜか地雷系の髪型で自撮りをしている愛津。

愛津　は、愛されたい……。

良太　今度は何に嵌った、ODか。

愛津　この写真ネットにあげたら何人がいいねするかな。

良太　誰もしねえよ。

愛津　世界に一人くらいはいるでしょ。いい加減にして。

良太　お前がいい加減にしろ。その一人俺だろ、絶対。

は？

愛津　は？

良太　俺今なんて言った？？？

愛津　そんなあ、うまくいくはずもない作戦が。

良太　熱中症かもしれない。

愛津　嘘だね、良太の部屋エアコンあるし。

何なら今、わたしの方が体調悪いから。鬱々とした気分。とめどない不安感。お腹も痛くなってきた。

良太　生理前症状RTAか？

愛津　デリカシーなさすぎて無理。ああ眼前暗黒感。

良太　大丈夫？

愛津 今日はお前を問いただしに来た。
良太 何何。

愛津 今から言う。勇気出すから。おえ。
良太 勇気吐くなよ。

愛津 ねえ、良太。これに心当たりない？

愛津、ポケットから魔法の紙を取り出す。

良太、紙を受け取って広げて見る。

すぐくまじまじと、じつくりと見つめる。

良太 ……この似顔絵、俺？

愛津 でしょ？

良太 うん。俺。七歳ごろにそっくり。この絵描いたの、お前？

愛津 ゆめみ。

良太 おー、さすが絵本作家。めっちゃうまいね。……俺、お前の母ちゃんに会ったことないんだけどな。

愛津 良太が島に来た時には、もういなかったもんね。

良太 この絵の横のさ、

愛津 うん。

良太 矢印引っ張ってメモしてある一文さ。

愛津 うん。

良太 「愛津を

良太 一生

良太 愛してくれる人」

良太 俺に入ってるプログラムだわ。

愛津 アンドロイドってこと！？

良太 けど、こんな紙知らない。何、これ？

愛津 魔法の紙だよ。これに書いたことは、全部本当になるの。

良太 あーね……そう、ふうん……。

愛津 ああもうやー……だー……！

愛津、良太に背を向けて寝っ転がる。

良太 やだって……やだって、やだって……。

良太、机の上の卓上三面鏡を床に設置する。さらに、部屋の収納から卓上三面

鏡を三台取り出す。合計四台の三面鏡が、鏡面を内側に向けてサークル状に床に設置される。三面鏡サークルの中に、良太が正座する。良太の前後左右に三面鏡があり、良太を取り囲んでいる状態。良太、前にある三面鏡をじっと見つめる。鏡を見ながら喋る。

良太

……やだって言うのもわかるよ。得体がしれないもんな。得体がしれないやつが、ずっと友達だったなんて、嫌に決まってるもんな。

その、ずっと黙ってたけど、自分が、そのメモの通りの存在だっていう自覚は、前からあったんだ。そっか、その魔法の紙のせいで、俺が出来たんか。

けど、俺、ちゃんと人間だから！ アンドロイドじゃないし。なんだ？ 妖怪とかでもないから！

愛津

んなこたあ気にしとらんわ。愛してくれる人って書いてんだから人に決まってるんだろ！

良太

え？

愛津

それより、嘘じゃないって言った？

良太

人に決まって……？

愛津

嘘つき。

良太

は？

愛津

嘘つきだったの。う、嘘つきって言ったの。

愛される覚えなんてない。

私は、誰かに愛されるものなんて持ってないもの。

隣のおばさん、山田のおばさん、お友達、みんな、私を好きって言うわ。でも、本当に私を知っていれば、好きなんて言うはずないの。

良太

そんなわけないだろ。

愛津

お父さん、お母さん、みんな、私を愛してるって言うわ。でも、本当の私を知っていれば、愛してるなんて言うはずないの。

良太

ちょ、聞いて？

愛津

英二くん。

良太

英二？

愛津

も、私は、瀬戸の花嫁になりたかったのに、

良太

瀬戸の……？（※友達の瀬戸を思い描く。）

愛津

あの人私の実家に住むって言うんだもの。お腹には愛津がいて、もう逃げられないんだと思ったの。でも、私、少ししか言わなかった。少しは言ったけど、島を出たたって、あんまり言うとう島のみんなに失礼じゃない。私って、本当の私を知らないみんなを、騙していたのよ。でも、誰も私のことを知らないとしたら、それはそれで、おかしいのよ。だって私には、絵本があるんだもの。

良太
……。

良太、そういえばさつき鏡設置する時その辺に置いた（はず）の魔法の紙どこいったかなと探す。

愛津
絵本は、私の中身を削ぎ落として作るの。私の中身でできているのよ。みんな、私の絵本を読んで、好きだと言ってくれてるの。それってつまり、みんなわたしの中身を知って、それでも好きってことじゃない？
そうだと嬉しくて、そうならいいと思って……

良太、魔法の紙を見て、愛津が夢海の内面と同期していることに確信を持つ。

良太
愛津。
聞こえる？
違うよ。

愛津は絵本作家じゃない。

愛津
……私？

良太
愛津。

愛津
そうだよ。わたしは絵本作家じゃないよね。
うん。

「お母さんが望むように、お母さんを知る」

なんて、願っちゃだめだ。飲み薬を注射で打つみたいなものだ。おい、起きてるか？ お前はだれだ。

愛津
愛津……。

良太
そうそう。

これ消しゴム使える？ 願いつて取り消しできるかな。かくなる上はタイムリープして、歴史改編しようぜ。

愛津
わたしには何も無い。

良太
あれ。

愛津
得意なこともない。夢もない。大学行ったけど別に勉強好きじゃない。とりま実家出たいなと思うけど実家を出たい理由を訊かれたら逆ギレするほど理由がない。小さいときは、お母さんみたいな絵本作家になったけど、絵本作家はだめなんだって。なんでかわかる？ なんでだっけ。忘れちゃったんだけど、お母さんがだめだって。

良太
お前は誰だ。

愛津
愛津。

良太 愛津か〜。

愛津 でもわかつちゃったんだよね。絵本を書くのは、自分の中身を見せることなんだよ。でも、お母さんは、人に見せられるような中身してなかったんだ。だから、苦しくなっちゃったんだよ。

良太 賛成。大賛成。わたしもお母さんと一緒。人に愛されるのは解釈違い。

愛津 そんなことないだろ。

良太 なくない。

愛津 自分じゃ見えないからな、自分じゃ自分を愛しにくいだろ。でも、他人なら愛せる。

良太 わたしのこと知らないくせに。

愛津 お前だって、お前が知ってるお前しか知らない。お前が知ってるお前が、お前の本当とは限らないぞ。

愛津 そんな言うならさあ、良太ア。わたしが、悠里ちゃん殺したって言ったら、どうする？

良太 知ってるって言う。

愛津 え？

良太 部屋に行ったら臭いがした。

愛津 え？ うそ？

良太 どうしよっかなって思ったけどなあ。ま、やつちまったもんはしょうがないから。弔うしかなかった。

愛津 通報した方がいいんじゃない？

良太 しないよ。愛津が何かなったら困るから。

愛津 こわい……。

良太 なんでや。

愛津 ごめんなさい。

良太 え？

愛津 ……って、お母さんが。良太の人生縛ったこと、ちよつとだけ悪いと思ってる。ちよつとだけなんだ。

愛津 うん。だって、わたしのためだったから。ああ……。

良太 なんだ？ いるじゃん。わざわざ俺を作らなくても。

愛津 うん。よかった。あれ何？

愛津、三面鏡サークルを指す。

良太 ば、パワースポット……。

愛津 入っていい？

良太
いいよ。

愛津、サークルイン。

愛津
わあ。(笑)

○ 21

愛津の家のリビング。「6」の続き。

月渚
愛津
月渚は？
は？

その一生愛されるおまじないってやつ、月渚にもないの？ お姉ちゃんだけずるくない？ 月渚だってお母さんの子なのに！

愛津
誰かに愛されてるんだよって言ったの。
それはお姉ちゃんの見解でしょ。でもお母さんは結局自殺してる。つうことア、お母さんはその見解にたどり着いてないんだよ。だから、月渚の分のおまじないもあるはずなの！

愛津
でも月渚の分は紙に書かれてなかったし……。

月渚
紙って？

愛津
いや、なんでも。

あれじゃない？ 月渚が生まれる前に、既にわたしの分のおまじないでパワー使いきったとかじゃない？

月渚
は？ 一生に一度しか使えねえ系の大業なわけ？

愛津
ちがうかな……。

月渚の分のおまじないがなくなつて、それなのにお母さんが三途の川トライアスロンを選んだとしたらあれだよ。

愛津
三途の川トライアスロン？

月渚
お母さんは、自分が人を愛せることには気づいたのに、自分を愛している誰かが居ることには気づかなかつたんだよ。お母さんは月渚を愛してたから、月渚にはわざわざおまじないをかけなかったけど、お母さんの寂しい気持ちは消えなかったわけ。そういうこと。

愛津
その解釈は、無理矢理感あるくない？
月渚
でも、思い込みってそういうもんつしょ？

愛津　そっか。自分のことが嫌になるのも、好きになるのも、一種の思い込みだもんね。
月渚　だから、別に月渚の分のおまじないは、なくてもいいよ。

愛津　そうなの？

月渚　うん。月渚はお姉ちゃんのこと大好きだから。

愛津　わあ……！！

月渚　愛とは何か、わからないとしてもさ、自分が持つてるその感情とか、相手から向けられてるその感情とか、それらが愛だと気づけないなんて、そんな大人はバカだと思うよ。

愛津　口の利き方だけに気をつけるようルナちゃん、劇の台本書けそう？

月渚　こんな話で書けるわけねえだろ。

愛津　よっしゃお前のスマホのルナルナのデータ書き換ええたる。

月渚　だめ月渚ルナルナのアドバイスにケチつけるのが趣味だから！！

愛津、月渚、月渚の部屋に行く体で退場。

○ 2 2

月渚、退場するかと思ったらその足で戻ってくる。

月渚　さて、このお話はこれでおしまいです。いや、始まりかな。消滅かも。なかったことになるからね！

とにかく、今夜お姉ちゃんは、魔法の紙にお願いを書いて山田で買った鷹の爪入った小瓶に詰めて、さっさとお布団に入ります。

明日の午前中には、悠里ちゃんが帰ってきたという噂が島中に流布し、悠里ちゃん本人が、うちにお土産を持って来るはずですよ。

楽しみです！

それではここまで、月渚の妄想にお付き合いいただきありがとうございます。

宿題おーわり！！

○ 2 3

愛津の部屋。愛津、タオルケットをかけて寝ている。

スマホのアラームが鳴る。

アラームを止める。

二度寝。

間髪入れずにアラーム。止める。

三度寝。

間髪入れずにアラーム。止める。眠気覚ましにユーチューブで動画を見る。

良太に電話をかける。

愛津

良太ア。

○ラスト

瀬戸内海に浮かぶ、とある小さな島の海岸。島の港からは離れており、周囲に人影はない。コンクリートの堤防のすぐ下には薄茶色の狭い砂浜と磯、テトラポッド。

堤防の上に愛津が立ち、海の方を向いている。堤防を背にして海と反対側、つまり島の内陸を向いて道路の端にしゃがみこんでいるのは、良太。

愛津、海に向かって叫ぶ。

愛津

もう二度と戻ってくんなー！

良太

何の話？

愛津

知らん。

良太

は？

愛津

何してんだろわたし。

良太

海行ってくつて言ったのお前やん。

愛津

まあね。

良太

は？

愛津

もういいや。なんかすごいもういいやって気分。

愛津、堤防を降りて道路に立つ。良太を置いて家に帰り出す。

良太

そりや、本人がいいならいいけど……。

良太、立ち上がって堤防の向こう側、波打ち際を見る。

良太

ねー、何か光ってね？

愛津 良太 愛津

え？
ほら、波打ち際。
……知らない！

【終】